

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成27年 6月 30日現在

機関番号：16401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22792230

研究課題名（和文） 発達障害の子どもと家族の調和

研究課題名（英文） Harmonization between Children with Developmental Disorders and Their families

研究代表者

川島 美保（KAWASHIMA MIHO）

高知大学・教育研究部医療学系・講師

研究者番号：90380328

研究成果の概要（和文）：発達障害をもつ子どもの母親5名に子どもが診断されるまでと診断後の経時的プロセスを追って、発達障害の子どもとの相互作用、心理について半構造化インタビューを行った。発達障害をもつ子どもの母親は、診断されるまでは試行錯誤しながら子どもに関わっていた。また、診断後は子どもの特徴に応じた関わり方を掴むまでは、子どもの気になる行動を正そうと怒ってばかりいた。しかし、【子どもを自分の枠にはめようとする自分自身に気づく】ことで、【ありのままの子どもを受け入れる姿勢】に変化し、子どもができていることを褒める関わりへと変容していた。

研究成果の概要（英文）：For five mothers of children with developmental disorders, the processes before and after they received a diagnosis of the developmental disabilities were traced and a semi-structured interview with the mothers was designed to ask about their interaction with the children and their mental state.

The mothers of children with developmental disorders interacted with the children through a trial and error process until they had a diagnosis. Even after having the diagnosis, they were often annoyed with the children, trying to fix their behavior, until they found a way of interacting with the children in a manner that was more suitable to the characteristics of the children. However, when they found that they had been trying to make the children behave as they wanted them to, the mothers began to think that they should accept the children as they are and try to praise the children for what they could do.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：発達障害、子ども、家族、調和、小児看護、家族看護、相互作用、質的研究

1. 研究開始当初の背景

近年、発達障害について関心が高まっている。発達障害児については、障害や個性に

じた看護介入及び多職種が協働支援が必要とされながらも、十分な支援が行われていない現状にあり、早急な対応が求められる事由

である。

発達障害児への自己肯定感や成功体験を高める継続した関わりによって、問題行動が減少することが報告されていることから、発達障害児の問題行動は、子どもそのものの問題としてではなく、周囲と子どもとの相互作用のあり方として捉えることが重要である。すなわち、発達障害の子どもと周囲が調和することが必要であり、そのような状態に至るケアが求められる。本研究では、発達障害の子どもが家族や周囲の人との関係性や相互作用に問題が生じ、子どもの感情表出を他者の認識からは問題行為として捉えられやすい現状をふまえ、発達障害の子どもが自分らしさを大切にしながら生きることとは、心身、環境との調和であるという立場から、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、発達障害をもつ子ども・家族との調和を生む看護の中範囲理論構築を行い、看護における発達障害児への支援の質の向上に寄与することを最終目的とする研究の一部として、発達障害をもつ子どもと家族の調和がどのようなものかを明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 研究参加者

発達障害の子どもをもつ母親 5 名

(2) 研究デザイン

修正版グラウンデッドセオリー (M-GTA)

(3) データ収集方法

発達障害の子どもを母親 5 名に子どもが診断されるまでと診断後の経時的プロセスを追って、発達障害の子どもとの相互作用、心理について半構造化面接法を行った。

インタビュー時間は、1 人 78 分～129 分(平均 107 分)であった。

(4) 倫理的配慮

高知大学医学部倫理委員会の承認を受けて実施した。

また、研究参加者には、研究の趣旨、面接内容の記録、データの匿名性、機密性及び研究参加の撤回の自由について説明書を用いて口頭で説明を行い、同意書にて同意を得た。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

本研究の対象者である発達障害の子どもをもつ母親は、30 代から 40 代であった。子

どもは全て男児で、現在の年齢は 8 歳から 13 歳であった。子どもの診断名の内訳は、アスペルガー症候群 2 名、高機能自閉症スペクトラム障害 2 名、高機能広汎性発達障害であり、全員が 4 歳で診断されており、診断後の経過年数は 4 年から 9 年であった。

(2) 結果

本研究の結果より、発達障害の子どもをもつ母親は、発達障害と診断されるまでは【生まれたときから気になる】ものの【ふつうの子ども】だと思いながら子どもに関わっていたが、【他の子どもとの違いを知る】ことで、子どもができないことをできるように【自分が楽になるために思考錯誤する】ことをしていた。診断されたときには、【発達障害という病名がついた安堵感】をもちながら、【病名に子どもの個性を奪われる】体験をしていた。子どもの特徴を踏まえた関わり方を掴むまでは、<子どもの行動を正そうと怒る>ことばかりしていた。

そのような【子どもを自分の枠にはめようとする自分の問題に気づく】という母親自身のあり方に、母親自らが気づき、子どもと母親である自分との不調和な状態に気づいたことが子どもと母親の相互作用を大きく変える転機となっていた。

その後の母親は、常に自分のあり方を自身に問いかけながら【ありのままの子どもを受け入れる】姿勢で、<子どものできていることを褒める>ことを意識的に行うことで、子どものできることも増えていき、母親の中では、子どもの存在は“気になる子”や“発達障害の子ども”ではなく、“ユニークな子ども”として立ち現れるようになった。“ユニークな子ども”がどんなにがんばっても難しいことについて、母親は【子どもが楽なようにできないことを助ける】あるいは【子どもの揺れ動く気持ちを支える】ように関わっていた。

そのプロセスの中で母親は【“ユニークな”子どもの取り扱い説明書】を試行錯誤の末、みついていた。“ユニークな子ども”が現在も将来にも楽に生きられるように【“ユニーク”な子どもが自信をもって生きられる手段を模索する】ことをしながら、【“ユニーク”な子どもが安心できる環境をつくりたい】と現在を生きることが明らかとなった。

本研究結果では、発達障害をもつ子どもと母親の調和は、母親の【子どもを自分の枠にはめようとする自分自身に気づく】という転機と【ありのままの子どもを受け入れる】という母親のこころの中で生まれた子どもと母親自身との調和が根幹となって生み出される、“ユニークな子ども”に母親が歩調を合わせてともに歩いていくプロセスであることが示唆された。

(3) 考察

これまでに発達障害児をもつ母親の体験している困難（松岡ら, 2013）等が明らかにされているが、本研究では、そのような困難な状況でも、母親自身が試行錯誤しながら、自らの力で、子どもとの安定した調和のとれた関係を築き、子どもが将来も社会の中で楽に生きられるように働きかけているプロセスが明らかとなった。

本研究の知見で大きなものは、母親と子どもの相互作用が肯定的に変容する根底にあるものが、母親の子どもへの関わり方のスタンスであり、母親の【子どもを自分の枠にはめようとする自分自身に気づく】ということが全ての始まりであるということである。

自分の枠を取っ払った母親は、【ありのままの子どもを受け入れる】ことが可能となり、これまでは理解不能であった子どもの言動について、母親目線ではなく、子ども目線で捉えることができるようになるという視点の変換が行われていた。

視点の変換が行われる以前では、母親の視点に合わせて子どもを変えようとしていたのが、子どもの個性をありのままに楽しみ関わるできるようになった。

そのような母親に見守られながら、子どもたちは、自分らしさを大切にしながら生きていくことができるようになったのであると考える。

(4) 看護への示唆

看護者は、発達障害をもつ母親の【子どもを自分の枠にはめようとする自分自身に気づく】【ありのままの子どもを受け入れる】ことを促すために、母親や子どもを肯定し、尊重しながら歩調を合わせてともに歩いていく関わりが重要であると考えます。

(5) 本研究の意義と限界

本研究の対象者は5名と少ないこと、子どもの診断名がアスペルガー症候群と高機能自閉症スペクトラムを含み、同一のものではないこと、現在の子どもの年齢が学童期から思春期にわたることから、一般化には限界がある。

しかしながら、母親の語りから、母親と発達障害をもつ子どもの相互作用に着目し、その肯定的な変化についての知見を得たことは本研究の意義であると考えます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 川島美保：学生の自律性を促す小児看護学実習における教育実践報告，高知大学教育研究論集，16，2012

- ② 藤原紀世子，川島美保：小児慢性疾患の同胞をもつ青年期のきょうだいが得る糧、日本小児看護学会誌，20（1），2011

- ③ 山脇京子，戸田由美子，小松輝子，北村亜希子，尾原喜美子，坂本雅代，川島美保他：高知大学医学部看護学科における「看護職として必要なコミュニケーション力チェックリスト」の作成報告，高知大学看護学会誌，5（1），2011.

〔学会発表〕（計7件）

- ① Miho Kawashima， Analysis of experience to participation in a Parenting Education Program. The 9th International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery, 30 June-1 July, 2012, Kobe Portopia Hotel (Kobe)

- ② 川島美保他：コーチング学習が看護学生に与えた影響（第3報）学習2年後のインタビューから，第71回日本公衆衛生学会，2012年10月24日-26日，山口市市民会館、サンルート国際ホテル山口他（山口県）

- ③ 尾原喜美子，川島美保他：チーム基盤型学習法(Team Based Learning)による小児看護学授業の展開と評価—実施3年間の比較—，第38回日本看護研究学会学術集会，2012年7月7日-8日，沖縄コンベンションセンター（沖縄県）

- ④ 川島美保：東日本大震災での医療支援活動による気づきから得た今後の課題，日本災害看護学会，日本災害看護学会第13回年次大会，2012年9月9日-10日，大宮ソニックシティ（埼玉県）

- ⑤ 川島美保他：ペアレンティング・エジュケーション・プログラムの活動報告，第52回母性衛生学会学術集会，2011年9月29日-30日，国立京都国際会館（京都府）

- ⑥ 尾崎貴美，川島美保：キャリア中期看護師の看護職から受けたメンタリング—認定看護管理者制度・セカンドレベル教育修了者を対象に—，31回日本看護科学学会学術集会，2011年11月2日-3日，高知県民文化ホール、高知市文化プラザかるぼーと、日航旭ロイヤルホテル（高知県）

- ⑦ 尾原喜美子, 川島美保他 : チーム基盤型学習法 (Team Based Learning ; TBL) を導入した小児看護学の授業評価, 第 36 回日本看護研究学会学術集会, 2010 年 8 月 21 日-22 日, 岡山コンベンションセンター [岡山県]
- ⑧ 尾原喜美子, 川島美保他 : チーム基盤型学習法 (Team Based Learning; TBL) を導入した小児看護学の教育効果, 第 41 回日本看護学会－看護教育－, 2010 年 10 月 14 日-15 日, 大津プリンスホテル, 滋賀

[図書] (計 3 件)

- ① 川島美保他 著, 橋本和子監修 : 生きる力となるもの, ふくろう出版, 2012
- ② 川島美保他 著, 中野綾美編 : 小児看護学－小児の発達と看護, メディカ出版, 2012 pp420
- ③ 川島美保他 編著, 橋本和子監修 : 言葉と人生一心を動かされたあの一言一, ふくろう出版, 2011

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川島 美保 (KAWASHIMA MIHO)
高知大学・教育研究部医療学系・講師
研究者番号 : 90380328